

創立20周年記念演奏会

樋口隆一 指揮

明治学院バッハ・アカデミー

Ryuichi Higuchi, dirigent & Bach Akademie Meiji Gakuin Tokyo

バッハ:《ヨハネ受難曲》第IV稿(1749年)

J. S. Bach: Johannespassion BWV245 Fassung IV (1749)

2022年3月28日(月)

19:00開演(18:00開場)

Monday, 28 March, 2022 at 19:00

新型コロナウイルス感染防止策実施のため、時間に余裕を持ってご来場下さい。

会場:  紀尾井ホール
Kioi Hall 東京都千代田区紀尾井町6番5号

樋口隆一(指揮)

明治学院バッハ・アカデミー合唱団・合奏団(古楽器使用)

大島博(福音史家・テノール) / 小森輝彦(イエス・バリトン)

光野孝子(ソプラノ) / 庄司祐美(メゾ・ソプラノ)

藤井雄介(テノール) / 土田悠平(バリトン)



明治学院バッハ・アカデミー合唱団・合奏団



大島博
(福音史家・テノール)



小森輝彦
(イエス・バリトン)



光野孝子
(ソプラノ)



庄司祐美
(メゾ・ソプラノ)



藤井雄介
(テノール)



土田悠平
(バリトン)

発売日 2021/12/25(土) 10:00~

入場料(各税込)

全指定席

S席 ¥6,000 A席 ¥4,000 学生 ¥1,000

※学生券(¥1,000)は、チケットぴあ(0570-02-9999)でのお取り扱いとなります。
ご購入いただきましたお客様は当日学生証をご提示ください。

チケットお申込み

チケットぴあ

0570-02-9999(音声自動応答・Pコード:209-650)

主催:明治学院バッハ・アカデミー <http://bachakademie.web.fc2.com/>

後援:ドイツ連邦共和国大使館 / ドイツ学術交流会(DAAD) / 日本バッハコンクール実行委員会

お問合せ:株式会社AMATI Tel.03-3560-3010 〒107-0052 東京都港区赤坂1-14-5-S201 <http://www.amati-tokyo.com>



日独交流160周年
Jahre Freundschaft
Deutschland-Japan



DAAD 日本
Deutscher Akademischer Austauschdienst
ドイツ学術交流会

次のことをあらかじめご承知の上、
チケットをお買い求め下さい。

①やむを得ない事情により、曲目等が変更になる場合がございます。公演中止を除き、お買い求めいただきましたチケットのキャンセル・変更等はできません。②いかなる場合もチケットの再発行はできません。紛失等には十分ご注意ください。③演奏中は入場できません。④未就学児の同伴はご遠慮下さい。また、就学児以上のお子様もご入場には1人1枚のチケットが必要です。⑤全指定席です。指定の座席にてご鑑賞下さい。⑥場内での写真撮影・録音・録画・携帯電話等の使用は固くお断りいたします。⑦ネットオークション等によるチケットの転売は、トラブルの原因になりますのでお断りいたします。⑧他のお客様のご迷惑となる場合、主催者の判断でご退場いただく場合がございます。

《ヨハネ受難曲》は、バッハがライプツィヒのトマス・カントルとして活動した27年間を通じて
もっとも多く取り上げた受難曲。この第IV稿は1749年、まさに最晩年の決定稿です。
苦難の時代に生きる私たちにも、希望と慰めを与えてくれます。(樋口隆一)

樋口隆一(指揮)

1946年、東京生まれ。音楽学者・指揮者。慶應義塾大学文学部卒、同大学院博士課程中退。ドイツ学術交流会(DAAD)奨学生としてドイツ留学。バッハのカンタータの研究(『新バッハ全集』I/34)でチュービンゲン大学哲学博士。A.スムスキーに指揮法を師事し、シュトゥットガルト聖母マリア教会で合唱指揮者を務めた。帰国後、音楽学者、指揮者、評論家として活動。ミハエル・ギーレン、若杉弘の助言を得て、1994年、指揮活動を再開。2000年、明治学院バッハ・アカデミーを設立。2010年までは明治学院チャペル、その後はサントリーホール、紀尾井ホールを中心に宗教音楽の傑作を次々に上演。『バッハ』(新潮文庫)、『バッハ・カンタータ研究』(音楽之友社)、アーノンクール著『古楽とは何か』(共訳、音楽之友社)、ノヴァーク著『ブルックナー研究』ほか著訳書多数。バッハ《マタイ受難曲》(後期稿)、ベートーヴェン《ミサ・ソレムニス》、(ユニバーサルミュージック)、フォーレ《レクイエム》(オクタヴィア・レコード)等のCDも話題を呼んでいる。現在、明治学院大学名誉教授。音楽三田会会長、一般社団法人樋口季一郎中将顕彰会会長。1988年、京都音楽賞、1989年、辻荘一賞受賞。2002年、オーストリア学術芸術功十字章受賞。2015年、ドイツから第2回テオドル・ベルヒウム賞を受賞した。

大島 博(福音史家、テノール)

熊本県生まれ。中央大学法学部卒業後、東京藝術大学音楽学部声楽科に入学。渡辺高之助、高 文二、原田茂生、中山悌一の各氏に師事。同大学院在学中の86年、ミュンヘン音大に留学、エルスト・ヘフリガーに学ぶ。90-91年D.フィッシャー＝ディースカウに師事。95年東京藝術大学大学院博士課程を修了。宗教曲の分野で、初期バロックから現代作品まで幅広いレパートリーを持ち、とりわけバッハの受難曲における福音史家の演奏には定評がある。また、ドイツ・リート及び日本歌曲の演奏にも積極的に取り組んでおり、自主企画によるリサイタルに加えて各地での客演も数多い。96年からは(ドイツ・リートのためのしみ)と題した、ドイツ歌曲を知るためのレクチャーを継続中。2004年からはシュベールの『冬の旅』演奏会を毎年開催している。近年は、さらに合唱指揮者、発声指導者としても幅広く活動し、ドイツ詩の翻訳も手がける。国立音楽大学、立教大学大学院キリスト教学研究科非常勤講師。ジングアカデミー東京主宰。

小森輝彦(イエス、バリトン)

日本人初のドイツ宮廷歌手。17年にわたるドイツ滞在生活中に終止符を打ち、2012年秋に日本に帰国した。プラハ州立歌劇場での欧州デビュー後、独アルテンブルク・ゲラ市立歌劇場専属第1バリトンとして12年間活躍。その傍らザルツブルク音楽祭をはじめヨーロッパ各地に客演し、演じた役は70を超える。二期会、新国立劇場、東京室内歌劇場などの公演でも、数多くの主役を務め、流麗な歌唱と強い存在感で公演を成功に導いた。東京芸大、同大学院、文化庁オペラ研修所、ベルリン芸術大学で学ぶ。五島記念文化財団オペラ新人賞受賞。二期会会員。東京音楽大学教授。東京音楽大学付属高等学校長。日本R.シュトラウス協会常務理事。日本声楽発声学会理事。2019年6月にリリースした初アルバム『R.シュトラウス歌曲集(ピアノ:井出徳彦)』はレコード芸術で準特選盤に選ばれた。公式ホームページ <http://www.teru.de>

務理事。日本声楽発声学会理事。2019年6月にリリースした初アルバム『R.シュトラウス歌曲集(ピアノ:井出徳彦)』はレコード芸術で準特選盤に選ばれた。公式ホームページ <http://www.teru.de>

光野孝子(ソプラノ)

島根大学教育学部特別音楽課程卒業。二期会オペラスタジオマスタークラス修了。修了時に優秀賞受賞。第5回藤沢オペラコンクール入選。二期会新進声楽家のタベ、二期会オペラスタジオ修了公演(チェッキーナはいい娘)チェッキーナ、墨田区民オペラ(ラ・ボエム)ミミ、二期会公演(ヴァルキューレ)オルトルンデ、二期会新進オペラ公演(魔笛)パミーナ、新国立劇場公演(ローエングリン)8人の貴婦人、二期会新進オペラ公演(フィガロの結婚)伯爵夫人、荒川区民オペラ(カルメン)ミカエラ、二期会公演(エジプトのヘレナ)妖精、墨田区民オペラ(魔笛)パミーナ役などに出演。また大村恵美子氏訳詩による日本語で歌うバッハとの出会いにより、バッハを始めとする宗教曲に開眼し、東京バッハ合唱団、明治学院バッハ・アカデミー他、数多くの演奏会に出演。2006年ライプツィヒ国際バッハ音楽祭では、聖ニコライ教会でのカンタータ音楽礼拝でソプラノ・ソリストとして好評を博した。1997年文化庁芸術インターンシップ研修員。二期会会員。

庄司祐美(メゾ・ソプラノ)

4歳よりピアノに親しむ。女子学院中学・高等学校で聖歌隊に所属。慶應義塾大学文学部心理専攻卒業後、東京藝術大学音楽学部声楽科に入学、同大学院独唱科博士後期課程修了。大学院在学中に藝大定期演奏会メンデルスゾーン《エアリア》(ゲルハルト・ボッセ指揮)ソリスト。シュトゥットガルト音楽大学でコンラート・リヒター氏のリートクラス修了。シュトゥットガルトのバッハ週間カンタータ演奏会、演出付《ヨハネ受難曲》、シャリーノ《ガラスの下の声》ソリスト。マックス・レーガーの歌曲演奏はSWRで放送された。帰国後は二期会(ジュリアス・シーザー)、《ワルキューレ》、二期会week inサントリーホール、オーチャードホール開館20周年記念ワーグナー・ガラコンサートや《第9》、マラー《復活》、《大地の歌》に出演。2006年以來定期的にリサイタルを開催。その後も渡欧し、ペーター・シュライアー、ブリギッテ・ファスベンダー各氏のマスタークラスに参加。2010年ドイツ、ボンでのシューマン生誕200年記念リサイタルは現地新聞紙上に好評を得る。二期会会員。日本演奏連盟会員。

藤井雄介(テノール)

大分県大分市出身。広島大学教育学部音楽科卒業後、東京藝術大学音楽学部声楽科を経て、同大学院修士課程および博士課程修了。これまでに、バッハ《マタイ受難曲》《ヨハネ受難曲》の福音史家およびテノールソロ、ヘンデル《メサイア》、ハイデン《天地創造》、モーツァルト《レクイエム》、ベートーヴェン《交響曲第9番》、メンデルスゾーン《エリヤ》、ドヴォルザーク《スターバ・マーテル》など、主に宗教的声楽作品のソリストを多数務める。バッハ・コレギウム・ジャパン(鈴木雅明音楽監督)ではソリストおよび声楽メンバーとして国内外における多数公演・録音に参加。2015年2月にはアメリカ・

フィラデルフィア・メンデルスゾーン・クラブによるバッハ《マタイ受難曲》(メンデルスゾーン編曲版)公演に福音史家として出演した。広島文化学園大学准教授。

土田悠平(バリトン)

東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。卒業時に同声楽会新人賞を受賞。卒業後、ウィーン・ブライナー音楽院へ3年間留学。ブクステフーデ《われらがイエスの四肢》でソリストデビューし好評を博す。ドイツ歌曲、宗教曲を得意とする。小澤征爾、ジョン・ミュンフン、シャルル・デュトワ氏ら指揮のもと、数々のオペラや演奏会に出演。アルメニア国主催の音楽祭に招致され、大臣より賞状や感謝状を受けるなど好評を博す。ソロリサイタル“Lieder Einladung”を7回開催。ウィーンでもソロリサイタルを開催。近年では歌曲「野ばら」の研究者として注目を浴び、演奏の他、講演、企画も行っている。ヨーロッパを中心に、未発見とされる20曲の「野ばら」の楽譜収集に成功し、ニュース番組の特集やNHK「ラジオ深夜便」、日本経済新聞、毎日新聞などに取り上げられた。2018年には(公財)朝日新聞文化財団からの助成により「音楽劇コンサート『野ばら』の約束」を公演し好評を博した。CD-BOX及び楽譜集「『野ばら』111曲集」を出版。野ばらプロジェクト・エグゼクティブプロデューサー。 <http://nobara-project.com/>

明治学院バッハ・アカデミー合唱団

明治学院バッハ・アカデミーは、バッハ没後250年を記念して2000年に設立された。芸術監督は樋口隆一。白金の明治学院チャペルを本拠に、2010年まで年間6回の定期演奏会を行ってきた。《マタイ受難曲》(初期稿)のCDは国際的にも注目を集め、それが2006年、ライプツィヒ国際バッハ音楽祭出演へとつながった。合唱団は、明治学院関係者にとどまらず東京周辺在住のバッハ好きたちによって結成され、毎週月曜の夜、島崎藤村も学んだ明治学院記念館で、樋口隆一の指導で練習を重ねている。ポリフォニーの魅力を生かした清澄な合唱は高く評価されており、2011・12年、サントリーホール・フェスティバルにおける「ウィーン音楽散歩Ⅰ・Ⅱ」に出演。2013年11月、ベルリンのコンツェルトハウスでの日独合同合唱演奏会「日本の響き・ドイツの響き」、ブリュッセルの王室礼拝堂でのバッハ《マニフィカト》出演で国際的評価を得た。サントリーホールでは、2014年10月、バッハ《ミサ曲短調》、2016年3月、バッハ《マタイ受難曲》、6月、フォーレ《レクイエム》ほか、2017年10月ベートーヴェン《ミサ・ソレムニス》、2018年6月、2019年8月バッハ・カンタータ演奏会と自主公演を重ね、それらのライヴCDも高い評価を得ている。(指揮・樋口隆一、発声指導・光野孝子、伴奏・栗島和子)

明治学院バッハ・アカデミー合奏団

2000年4月、樋口隆一(指揮)と神戸愉樹美、渡邊順生、渡邊慶子を中心に、わが国を代表する古楽器奏者を集めて結成された。練習から演奏へと一貫して行われる彼らの音楽造りは、研究と実践、身ぶりとの対話によるワークショップであり、和やかな雰囲気の中に自発性を尊重した音楽が産み出される。2011年、2012年、サントリーホール主催「ウィーン音楽散歩」(樋口隆一企画・指揮)にも出演し、高く評価された。

<p>新型コロナウイルス感染防止へのご協力のお願い</p> <ul style="list-style-type: none">●マスク常時着用、咳エチケットの実践、入場時の手指消毒や検温にご協力ください。●ロビーでは、お客様同士の歓談などを極力控えてください。●出演者へのプレゼント、面会はお控えください。●感染防止策実施のため、時間に余裕をもってご来場ください。	<p>公演当日、以下に該当されるお客様はご来場をお控え下さい。</p> <ul style="list-style-type: none">●37.5℃以上の発熱、咳、呼吸困難、全身倦怠感、咽頭痛、鼻汁・鼻閉、味覚・嗅覚障害、目の痛みや結膜の充血、頭痛、関節・筋肉痛、下痢、嘔気・嘔吐の症状がある。●新型コロナウイルス感染症陽性とされた者との濃厚接触がある。●過去2週間以内に政府から入国制限、入国後の観察期間を必要とされている国・地域への訪問歴、及び当該在住者との濃厚接触がある。
---	--